

原子力に関する宗教者国際会議

12月5日(水) 17:40-18:10 ストーリーシェアリング 1

佐々木 道範

昨年の3月11日に東日本大震災が起こり、それに伴う原発事故によって僕の住む二本松市にも放射能が降り注ぎ、ホットスポットと呼ばれる場所になった。

震災当初僕達福島県民に正確な情報は知らされなかった。

テレビに映し出された福島原発が爆発した映像は、途中で消されて爆発する前の映像に切り替わった。文科省が100億円以上かけて作ったSPEEDIの情報も公開されなかった。

僕の息子が通う小学校の校庭がヘリポートになり、その向かい側の駐車場では、原発で爆した人達の除染作業をしていたが、二本松市民には知らされなかった。こどもたちの甲状腺を守る為の安定ヨウ素剤も配られなかった。3月下旬から御用学者が、小学校、中学校、公民館、福島県内いたる所で講演会を開いた。「大丈夫ですよ。」「心配いりませんよ。」

「普段通り生活していいですよ。」「笑っていれば放射能に負けませんよ。」と繰り返した。

文科省が年間被曝量の限度を1ミリシーベルトから20ミリシーベルトに引き上げた時も、県の放射線リスクアドバイザーは「国が決めたのだから、国民は従わなくてはいけない。」と言いつつ。記者会見でも国は、「直ちに健康に影響はありません。」と言いつつ。福島の田舎の人達が国やテレビや学者を疑うはずもなく、たくさんの人達が被爆してしまった。

国は福島県民を見捨てたのだと、こどもたちを守らないのだと絶望した。いろんな情報に違和感を覚え3月14日に家族を県外に避難させた。自分達で考え、自分達で家族を守らなければならないと思いNPO法人TEAM二本松を立ち上げた。

大切な家族を守るために、幼稚園に通ってくるこども達を守るために、何をすべきなのか悩みながら活動し始めた。

外部被曝を減らすこと、内部被曝をさせないこと、定期的に保養すること、この3つが福島でこどもたちを守るために必要だと考えた。

こどもたちの外部被曝を減らすために3月下旬から除染を始めた。

内部被曝をさせないためには、こどもたちの口に入るものの放射線量を測らなくてはいけいということで、食品の放射線測定器を購入して、昨年9月から食べ物、飲み物の放射線量を測り始めた。被曝によって、傷付けられたこどもたちの細胞を修復させる時間と場所が必要なので、昨年の夏休みから県外への保養活動を始めた。一年間外で遊べなかった幼稚園児は、例年の1/2~1/3しか体重が増加しなかった。

元気いっぱいエネルギーのかたまりのようなこどもたちが、外で遊べないのは異常です。なんとかこどもたちを安全な場所で思いっきり遊ばせたいと考え、二本松でも放射線量の低い場所にこどもたちが安心して走って、転んで、土いじりの出来る場所を作ることができました。グラウンドを借りて、除染し、芝生を植えて、放射線量も毎時0.07マイクロ

シーベルトまで下がり 10 月 20 日には、幼稚園の運動会をこの場所で行うことが出来ました。

11 月からは、内部被曝の測定も始める予定です。

行政の内部被曝検査は、なかなか順番が回って来ないこともあり、全国の方々からカンパをいただきホールボディカウンターを購入することができました。これで、定期的にこどもたちの健康管理が出来ます。

いろいろな繋がりの中で、やらなければならない事も増えてきて、何かたいそうな事をしているように聞こえるかもしれませんが、僕一人の力では、大切な家族さえ守れないのが現状です。

なかなか動けない僕を、立ち上がらせてくれたのはこどもたちです。外で遊べないこどもたちが、放射能で苦しんでいるこどもたちが、僕に問いかけてきます。「何でこんな目に合わなくちゃいけないの?」「誰がこんな世界を作ったの?」「あなたは被害者なの?加害者なの?」「お前のせいだ」と声に出さないこどもたちのいのちの声が僕を照らしました。

僕は無関心に生きてきました。チェルノブイリのこどもたちが甲状腺ガンになろうが、イラクのこどもたちが白血病になろうが、JOCの事故で二人が被曝し亡くなろうが、無関心に生きてきました。何も感じる事が出来なかった。

痛くも痒くもなく、ただ生きてきました。

僕は僧侶です。命と向き合うのが仕事です。命の教を聞いてきたはずなのに、自分にとって都合のいい命としか向き合っただけです。命を命だと感じずに生きてきました。原発があって当たり前だと思っていました。原発が爆発するはずないと思っていました。そういう僕の無関心な歩みが、今の社会を支えています。

無関心に生きてきた僕の人生が今こどもたちを苦しめているのだと、こどもたちのいのちに教えてもらいました。

「福島をかえせ」「福島をかえしてくれ」「こどもたちの笑顔をかえしてくれ」と怒りだけが僕の中にありました。この怒りを生きる力に変えてくれたのは、放射能に苦しんでいるこどもたちでした。

こどもたちに「お前のせいだ」と気付かされて、やっと立ち上がる事が出来ました。

僕のせいでこどもたちが苦しんでいるのだから、僕が何とかしなくちゃならないと思い活動しています。もちろん国も東電も許せません。米も食べられない汚染された大地に僕らは生きているのに 30 km 圏外の僕らには何の謝罪もない。本当に許せない。

それでもこどもたちに感謝し、今僕に出来る事、やるべき事をやるしかない。

震災当初はどうやったらこどもたちを守れるかという事だけで活動していましたが、時間が経つにつれて離婚、自殺などいろんな問題が浮き彫りになってきました。

こどもたちを守ろうと頑張ってきた親たちが疲れてきています。1年7ヶ月で放射能は無くならないのに、現実から目を背けたい人達が増えています。

無理もないでしょう。この食べ物は大丈夫なのか?この水は安全なのか?この土は汚染さ

れていないか？毎日の一つ一つの選択にこどものいのちや未来がかかっているのです。目に見えない放射能から子どもたちを守ろうと必死に生きてきたのです。国も学者もあれだけ大丈夫だと言っていたのに、なぜ子どもたちの甲状腺に異常が出るのですか。

子どもたちに健やかに育ってほしい、と願っている親だからこそ、目の前の現実と向き合えない、受け入れられないのです。

今の福島では、親たちを何とかしないと、子どもたちを守れなくなっています。避難した人も、福島に生きる人も苦しんでいます。

こどもの未来を考えて避難したのに、旦那さんを置いて、両親を置いて、町を捨てていったと言われます。

福島に生きる人は「なぜ逃げないの？」「こどものこと考えてないの？」「こどもを殺す気ですか？」と福島の子どもたちを想う善意によって苦しんでいます。

こどもを被曝させたい親なんかいません。こどもを病気にさせたい親なんかいないのです。どうか福島を追い込まないでください。

親たちの苦しみ悲しみを考えてください。

避難する人も、福島に生きる人も、苦しんで、悩んで、悩み抜いて出した決断なのです。正しいも、間違いも無い、尊い決断です。一人一人の人生を尊重して下さい。自分を正当化しないと生きられない福島になって来ています。自分の正義を掲げて夫婦で、家族で、地域で、いろんな所で、対立が生まれています。

みんな放射能によって苦しんでいるのに、悪いのは放射能なのに、苦しんでいる人達が、お互いに傷付け合う福島になってしまいました。

福島が叫んでいます。大地が、空が泣いています。福島の声聞いて下さい。声にならない子どもたちの、いのちの叫びを聞いてください。

出口の無い闇の中をさまよっている様な福島ですが、僕には光が見えています。それは子どもたちの、いのちです。子どもたちの輝くいのちが、福島の光です。

子どもたちのいのちの光に照らされて、福島の怒りや、悲しみが力に変わると信じています。放射能の中で必死に生きている人達がいることを忘れないで下さい。

福島を忘れないで下さい。

